

# 達成目標志向性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関係 ——遂行接近目標、遂行回避目標に注目して——

藤 井 勉

## 論文要旨

本研究の目的は、動機づけの達成目標理論 (Dweck & Leggett, 1988) における遂行接近目標／遂行回避目標と、賞賛獲得欲求／拒否回避欲求 (小島・太田・菅原, 2003) との関連を検討することであった。遂行接近目標は、他者から良い評価を得ることで有能感を得ようとする目標であり、正の評価を求める賞賛獲得欲求との関連が予測される。一方、遂行回避目標は、他者から能力が低いとみなされるのを避けることで有能感を維持しようとする目標であり、負の評価を避けようとする拒否回避欲求との関連が予測される。177名の大学生を対象とした質問紙調査を行い、分析の結果、仮説を支持する結果が得られた。遂行目標志向性を接近―回避の軸で2分することには議論があるが、本研究の結果は、その2分法の妥当性を高めることが示唆された。

**キーワード**【達成目標理論、遂行接近目標、遂行回避目標、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求】

## 問 題

**達成目標理論** 動機づけにおける主要な理論の一つに、達成目標理論 (achievement goal theory; Dweck & Leggett, 1988) がある。この理論では、人を「有能さ (competence) を求める存在」と仮定し、この有能さを求めて人は行動を起こすとみなす (上淵, 2004)。たとえば、同じ課題に取り組んでいる者が3名いたと仮定しよう。状況は3名とも共通して「課題に取り組んでいる」としても、その3名が抱いている目標は同一とは限らない。たとえば、Aさんは「自分の能力を伸ばすため」に課題に取り組んでいるかも知れない。Bさんは、「他者よりよい成績を目指して」課題に取り組んでいるかも知れないし、Cさんは「他者より悪い成績を取りたくない」ために課題に取り組んでいるかも知れない。

達成目標は、自己を比較対象とし、自己研鑽によって有能感を得ることをめざす“マスタリー目標”と、他者を比較対象とし、他者よりよい成績を得る、もしくは他者より低い評価を受けることを避けることで有能感を得る (または維持しようとする) “遂行目標”に分かれる<sup>1)</sup>。ゆえに、マスタリー目標を持つ者の評価基準は個人内／絶対的であり、遂行目標を持つ者の評価基準は個人間／相対的である。前述の例では、Aさんがマスタリー目標、Bさんが遂行接近目標、Cさんが遂行回避目標を有していると考えられる。

マスタリー目標を持つ者にとって、困難の知覚や失敗の経験は、「これまでとは異なる方法での対処が求められている」という情報として機能し、異なる方略を用いた解決が動機づけられ、ネガティブな感情は比較的生じにくい。また、失敗の原因を自身の努力不足に帰属する傾向がある (e.g., 藤井・上淵, 2010、研究1)。

これに対して、遂行目標を持つ者にとっての困難の知覚や失敗の経験は、自身の低能力を周囲に露呈してしまった、というネガティブな情報として機能するため、ネガティブな感情が発生しやすい。そして、以降の課題への動機づけが低下し、課題に回避的になる。また、失敗の原因を自身の能力不足に帰属しやすい傾向がある (藤井・上淵, 2010、研究1；達成目標理論のレビューとして、村山, 2003a；上淵, 2003, 2004 など)。

近年、この2つの評価基準 (個人内／絶対的 vs. 個人間／相対的) と、接近－回避の2次元を組み合わせた4種類の目標が提唱されている (e.g., Elliot & McGregor, 2001; Elliot & Thrash, 2002)。特に、遂行目標を2分し、他者よりよい成績をめざす“遂行接近目標”と他者より低い評価を避けることをめざす“遂行回避目標”に分ける3目標説が主張されている (Elliot & Church, 1997; 上淵, 2004)。

本研究では特に、この遂行接近目標と遂行回避目標に焦点を当てる。従来の達成目標理論は、接近－回避の軸はなく、マスタリー目標と遂行目標のみが仮定されていた。マスタリー目標は、効率的な学習方略の使用を促す (上淵, 1995)、自尊心と正の相関がある (Fujii, Yamada, & Uebuchi, 2011)、内発的動機づけと正の関連がある (Elliot & Church, 1997) など、一貫した結果が得られている。一方、遂行目標と諸変数との関連は様ではなく、シャイネスや能力への脅威を媒介して援助要請を回避したり、依存的な援助要請を行う (野崎, 2003)、効果的な方略の使用をある程度は促す (Hayamizu, Ito, & Yoshizaki, 1989) など、結果が一貫していない。遂行目標に接近－回避の軸を取り入れ、マスタリー目標、遂行接近目標、遂行回避目標の3目標を仮定することで、遂行目標の結果の非一貫性を説明しようとされる (レビューとして、村山, 2003a)<sup>2)</sup>。たとえば、遂行接近目標と遂行回避目標の相違を見出した研究として、Elliot & Church (1997) が挙げられる。ここでは、遂行接近目標は成績と正の関連があった一方で、遂行回避目標は成績と負の関連があったことが見出されている。また村山 (2003b) では、遂行接近目標および遂行回避目標と、種々の学習方略 (ミクロ理解、マクロ理解、拡散学習、暗記) との関連を検討し、それぞれの目標の予測力が異なることを示している。その他にも、Fujii et al. (2011) では、遂行接近目標は自尊心との相関が有意でない一方で、遂行回避目標が自尊心と有意な負の相関を示すことを確認している。このように、種々の研究によって遂行目標を2分する有用性が検討されている。ただし、村山 (2003b) によれば、欧米の研究と日本の研究の相違点として、遂行接近目標と遂行回避目標の相関係数の高さが挙げられている。村山 (2003b) によるレビューでは、欧米における遂行接近目標と遂行回避目標の相関係数の平均値は .33 程度であるが、日本では両者の相関は

平均して .63 という値が得られている。したがって、そもそも本邦においては遂行接近目標と遂行回避目標を区別することが妥当ではない可能性がある、と議論されている。したがって、この点に関する知見の蓄積は重要であると考えられる。

そこで本研究は、これらの議論に一資料を追加することをめざし、遂行接近／遂行回避目標と、後述する賞賛獲得欲求および拒否回避欲求との関係を検討することで、遂行目標について接近―回避の軸を用いた分類が妥当であるか否かを検討する。

**賞賛獲得・拒否回避欲求** 小島・太田・菅原（2003）は、他者からの肯定的な評価を目的としやすい“賞賛獲得欲求”と、否定的な評価の回避を目的としやすい“拒否回避欲求”を測定する尺度を開発した。小島他（2003）の研究2では、参加者に対して肯定的・否定的なフィードバックを与える場面想定法を用いた質問紙実験を行い、賞賛獲得欲求が高いほど肯定的なフィードバックに対する満足（e.g., 気分がいい、誇らしい）の得点が高くなり、拒否回避欲求が高いほど「テレ（e.g., はにかむ、照れる）」を感じやすくなることが示された。一方、賞賛獲得欲求が高いほど否定的なフィードバックに対する怒り（e.g., くやしい、頭にくる）の得点が高くなり、拒否回避欲求が高いほど「ハジ（e.g., きまりが悪い、体裁が悪い）」を感じやすことが示された。すなわち、小島他（2003）は、他者から受けるフィードバックに対する評価の方向性の個人差として賞賛獲得欲求・拒否回避欲求をとらえている（吉原, 2008）。

前述のマスタリー目標は評価の基準を自己とする一方、遂行目標は他者を基準とする。したがって、他者を基準とした目標志向性である遂行目標と、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求には関連がみられると予測される。特に、遂行接近目標は、他者から良い評価を得ることで有能感を得ようとする目標であり、正の評価を求める賞賛獲得欲求との関連が予測される。一方、遂行回避目標は、他者から能力が低いとみなされるのを避けることで有能感を維持しようとする目標であり、負の評価を避けようとする拒否回避欲求との関連が予測される。上記の関連がみられれば、遂行接近―遂行回避目標の分類の妥当性を高める一資料となるだろう。

**本研究の仮説** 上記を踏まえて、本研究では以下の作業仮説を立て、質問紙調査によって仮説を確認することを目的とする。

- 1) 遂行接近目標は、賞賛獲得欲求と正の相関関係がみられる。
- 2) 遂行回避目標は、拒否回避欲求と負の相関関係がみられる。

本研究では、主に遂行接近／遂行回避目標と賞賛獲得／拒否回避欲求との関連を検討することを目的とするため、マスタリー目標については特に仮説を設けず、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との相関関係を探索的に検討する。

また、本邦とは文化が異なると仮定されうる西洋と同様の知見が得られるかを確認することも重要であろう。したがって、本邦でも先行研究（e.g., Elliot & Church, 1997）と類似した知見が得られるか確認するために、参加者の達成目標志向性と成績予測などとの関連も検討

する。

## 方 法

**調査対象者** 東京都内および神奈川県内の大学に通う大学生 177 名（男性 97 名、女性 80 名、年齢の  $M=20.56$ 、 $SD=1.49$ ）を調査対象とした。

**調査時期** 2010 年 12 月および 2011 年 6 月に実施した。

**尺度構成** 達成目標志向性尺度（田中・藤田（2004）を一部改変；マスタリー接近目標、遂行接近目標、遂行回避目標、各 5 項目）、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島他，2003；因子負荷量の高い 5 項目ずつを用いた）。これらの尺度は 6 件法（1：全くあてはまらない—6：非常によくあてはまる）を用いて回答を求めた。また、自身の成績予測として、「このクラスの中で、自身の成績はどのくらいの位置にいると思うか」を 5 件法（1：下位—3：ほぼ平均—5：上位）で尋ねた。加えて、自身の将来の見通しとして、「自身の将来は、どれくらい明るいと思うか」を 5 件法（1：暗い—3：どちらとも言えない—5：明るい）で尋ねた。

**手続き** 講義時間の一部を利用し、被調査者に質問紙を一斉配布して回答を求めた。実施にあたり、本調査への参加は任意であることや、この調査で得られたデータを公表する際は、統計的処理を行い個人が特定できない状態にした上で公表することを教示した。参加者が回答に要した時間は 15 分程度であった。

## 結 果 と 考 察

以降に示す分析は、統計パッケージ SPSS17.0 および Amos18.0 を用いて行った。

**分析対象者の確定** データを収集した 177 名のうち、達成目標志向性尺度および賞賛獲得・拒否回避欲求尺度のいずれかの項目に欠損があった参加者のデータを分析から除外した。その結果、最終的な分析対象者は 171 名（男性 95 名、女性 76 名、年齢の  $M=20.57$ 、 $SD=1.49$ ）とした。

**確認的因子分析** 達成目標志向性尺度および賞賛獲得・拒否回避欲求尺度のそれぞれについて、田中・藤田（2004）および小島他（2003）と同じ因子構造が得られるかを確認するため、確認的因子分析を行った。

まず、達成目標志向性尺度は、マスタリー接近目標、遂行接近目標、遂行回避目標の 3 目標を仮定するモデルについて確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は  $GFI=.84$ 、 $AGFI=.78$ 、 $RMSEA=.10$  という値が得られた。また、試みとしてマスタリー接近目標と遂行目標の 2 目標を仮定するモデルの適合度指標を求めたところ、 $GFI=.76$ 、 $AGFI=.70$ 、

Table1 各尺度の相関係数と記述統計量 (N=171)

	2	3	4	5	6	7	$\alpha$	M	SD
1 マスタリー接近目標	.48**	.10	.20**	-.10	.22**	.10	.77	3.74	.75
2 遂行接近目標	—	.38**	.41**	.07	.20**	.05	.86	3.73	.86
3 遂行回避目標		—	.21**	.60**	-.07	-.25**	.73	3.28	.79
4 賞賛獲得欲求			—	.12	.13	.19*	.76	3.26	.78
5 拒否回避欲求				—	-.08	-.22**	.81	3.56	.89
6 成績予測					—	.15*	—	2.89	.84
7 将来予測						—	—	3.46	1.05

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 注) 変数1—5は6件法、6、7は5件法で回答を求めた。6、7は単項目であるため、 $\alpha$ 係数を記載していない。

RMSEA=.13 という値が得られ、3 目標を仮定するモデルの方がよい適合度を示していた。

続いて、賞賛獲得・拒否回避欲求尺度の2 因子を仮定するモデルについて確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は  $GFI=.92$ 、 $AGFI=.87$ 、 $RMSEA=.09$  という値が得られた。

これらの結果から、達成目標志向性はマスタリー接近目標、遂行接近目標、遂行回避目標の3 因子を、賞賛獲得・拒否回避欲求尺度は2 因子を仮定するモデルを採用して分析を進めることが可能と判断した。

**データの整理** 本研究で使用した尺度について、項目が複数にわたるものは合算平均得点を求めた。どの尺度も、値が高いほどその尺度名の傾向が強いことを示す。

**相関係数および記述統計量** 各尺度の相関係数と記述統計量を Table1 に示した。各尺度の信頼性の推定値として Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、その範囲は .73—.86 であり、十分な値が得られたと判断した。遂行接近目標は賞賛獲得欲求と有意な正の相関を示し、遂行回避目標は拒否回避目標と有意な正の相関を示していた。マスタリー接近目標は賞賛獲得欲求と弱い正の相関を示していた。また、遂行接近目標は成績予測と有意な正の相関があった一方で、遂行回避目標は将来の予測と負の相関が有意であった。

**仮説の検討** 本研究の目的は、遂行目標を接近—回避の軸で2 分することが妥当であるかを確認するため、遂行接近／遂行回避目標と賞賛獲得／拒否回避欲求との関連を検討することであった。調査に際し、1) 遂行接近目標は賞賛獲得欲求と正の相関がみられる、2) 遂行回避目標は拒否回避欲求との正の相関がみられるという2つの作業仮説を立てて検討を行った。

相関分析の結果から、遂行接近目標が高いほど賞賛獲得欲求が高く、遂行回避目標が高いほど拒否回避欲求が高いことが示され、本研究の仮説1) および2) は支持された。

また、冒頭で述べた村山(2003b)の研究では、遂行目標について接近—回避による分類が妥当と考えられるとしながらも、遂行接近目標と遂行回避目標の相関係数が本邦では高いことから、接近—回避の軸を用いて分類することには検討の余地があるとしている。しかし、本研究の結果を見ると、遂行接近目標と遂行回避目標の相関係数は .38 であり、むしろ欧米



の結果に近いものとなった。加えて、それぞれの達成目標志向性と賞賛獲得欲求、および拒否回避欲求との相関関係が仮説通り観察されたことから、本研究の結果は、遂行目標を接近一回避の軸を用いて2分することが妥当であることの一資料となろう。ただし、本邦において多く観察されている結果（遂行接近目標と遂行回避目標との高い相関）と異なる結果が得られたということは、調査対象とするサンプル（集団）によって結果が異なる可能性を示唆する。たとえば Fujii et al. (2011) では、本研究のサンプルとは異なる178名の大学生・大学院生に質問紙調査を行っているが、ここでは遂行接近目標と遂行回避目標との相関係数は.47という値が得られていた。このように、本邦における遂行接近目標と遂行回避目標との相関係数の程度は一貫しているとは言い難いため、知見の蓄積は必要であろう。

**仮説に含めなかった点** 以下、本研究において仮説には含めず探索的に検討した点について考察する。まず、マスタリー接近目標は、賞賛獲得欲求と正の相関を示しており、マスタリー接近目標が高いほど賞賛獲得欲求も高いことが示唆された。この結果を見ると、マスタリー・遂行を問わず、「接近目標」と「賞賛獲得欲求」が相関するものとも考えられる。しかし、マスタリー接近目標と賞賛獲得欲求との相関係数 ( $r=.20$ ) よりも、遂行接近目標と賞賛獲得欲求の相関係数 ( $r=.41$ ) の方が高く、遂行目標志向性が他者を評価の基準におくものであることが窺える<sup>3)</sup>。今後は、3目標説が妥当であるのか、それともマスタリー目標も接近一回避の2目標を仮定して4目標とするのが妥当であるのかを検討するために、研究が少ないマスタリー回避目標との関係を検討すること（上淵, 2004）も、達成目標理論の発展において重要と考えられる。

また、遂行接近目標は成績予測と有意な相関がみられた一方で、遂行回避目標と成績予測との相関は有意ではなかった。実際の成績 (Grade Point Average; GPA) を扱った Elliot & Church (1997) の研究とは手法が異なるが、西洋と文化的背景が異なる可能性のある本邦における研究でも、類似した結果が得られたと考えられる。

これに加えて、遂行回避目標は自身の将来の予測と負の相関をしていた。藤井 (2011) によって、遂行回避目標は他者軽視傾向（速水, 2006）や抑うつ・不安（寺崎・岸本・古賀, 1992）と正の相関があることが示されていることや、自尊心と負の相関が示されていること（Fujii et al., 2011）を踏まえれば、この目標志向性は適応的とは言い難いようである。しかし、遂行回避目標は賞賛獲得欲求とは弱い正の相関が有意であった。課題の遂行に関しては回避の目標志向性を持ちながら、他者からの賞賛を求める傾向もあるというこのアンビバレントな相関関係は解釈が難しい。たとえば、もともとは賞賛獲得欲求が高く、遂行接近目標を有している者が、失敗や困難を知覚する経験を重ねることで、遂行接近目標から遂行回避目標へと志向性を変化させた結果、賞賛獲得欲求を残しつつも、課題遂行に関しては回避的になるという可能性もあるだろう。もちろん、達成目標志向性自体の変化は、今回の横断的データでは検討することができないため、推測の域を出ず注意は必要である。しかし、数回の試

験期間を挟み、達成目標志向性の変化を実際に検討した研究も存在する (Fryer & Elliot, 2007) ことから、今後、達成目標志向性やそれに関連する諸変数の変化についても検討していくことは重要であると考えられる。

## 結 論

本研究の検討対象とした遂行接近目標／遂行回避目標と賞賛獲得欲求／拒否回避欲求との間には、仮説に沿った相関関係が得られたことから、遂行目標を接近―回避の軸を用いて2分することが妥当である可能性が高められた。

本研究では、遂行目標を2分することの妥当性について検討することを目的としたため、マスタリー接近目標については回避目標を設定せず、マスタリー接近目標、遂行接近／遂行回避目標の3目標を測定する尺度を使用した。特にマスタリー回避目標については、接近―回避の軸に基づいて定義することは可能であるものの、実証研究がほとんどなされていないという現状がある (村山, 2003a、上淵, 2004)。今後はマスタリー目標志向性についても、接近―回避で2分することが妥当か否かの検討が必要と考えられる。

## 引用文献

- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). "A social-cognitive approach to motivation and personality." *Psychological Review*, **95**, 256–273.
- Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). "A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation." *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218–232.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). "A 2×2 achievement goal framework." *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 501–519.
- Elliot, A. J., & Thrash, T. M. (2002). "Approach-avoidance motivation in personality: Approach and avoidance temperaments and goals." *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 804–818.
- Fryer, J. W., & Elliot, A. J. (2007). "Stability and change in achievement goals." *Journal of Educational Psychology*, **99**, 700–714.
- 藤井勉 (2011). 「達成目標志向性と他者軽視傾向の関連」『日本教育心理学会第53回総会発表論文集』237.
- 藤井勉・上淵寿 (2010). 「潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討」『教育心理学研究』**58**, 263–274.
- Fujii, T., Yamada, K., & Uebuchi, H. (2011). "The relationship between achievement goals and self-esteem." Poster presented at the 6th Self Biennial International Conference, Quebec, Canada.
- 速水敏彦 (2006). 『他人を見下す若者たち』講談社
- Hayamizu, T., Ito, A., & Yoshizaki, K. (1989). "Cognitive Motivational Processes Mediated by Achievement Goal Tendencies." *Japanese Psychological Research*, **31**, 179–189.

- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」『性格心理学研究』 **11**, 86-98.
- 村山航 (2003a). 「達成目標理論の変遷と展望—「緩い統合」というアプローチから—」『心理学評論』 **43**, 564-583.
- 村山航 (2003b). 「遂行目標未分化仮説の検討—遂行目標を接近・回避の枠組みで概念化することは妥当か」『ソーシャル・モチベーション研究』 **2**, 3-11.
- 野崎秀正 (2003). 「生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響：抑制態度を媒介としたプロセスの検証」『教育心理学研究』 **51**, 141-153.
- 田中あゆみ・藤田哲也 (2004). 「大学生の達成目標と授業評価、学業遂行の関連」『日本教育工学雑誌』 **27**, 397-403.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 「多面的感情状態尺度の作成」『心理学研究』 **62**, 350-356.
- 上淵寿 (2003). 「達成目標理論の展望—その初期理論の実際と理論的系譜—」『心理学評論』 **46**, 392-401.
- 上淵寿 (2004). 「達成目標理論」上淵寿 (編)『動機づけ研究の最前線』北大路書房 (pp. 88-107.)
- 吉原智恵子 (2008). 「社会的文脈における自己概念の変容と動機づけ」下斗米淳 (編)『自己心理学6 社会心理学へのアプローチ』金子書房 (pp. 123-133.)

## 謝 辞

本調査に際し、快くご参加を賜りました大学生のみなさまと、データ収集にご協力いただきました伊藤忠弘准教授 (学習院大学)、そして有益なコメントをいただいた匿名の査読者の先生に心よりお礼申し上げます。

## 注

- 1) マスタリー目標は、「学習目標」「習得目標」「熟達目標」などの用語が当てられることもある。たとえば上淵 (2003) のレビューでは、混乱を避けるために「学習目標」に統一して記載されているが、近年はマスタリー目標という呼称が定着しつつあるように思われる。したがって、本稿では統一して「マスタリー目標」と記載するが、上淵 (2003) と同様、他の用語を否定するものではない。
- 2) マスタリー目標も接近・回避の軸を用いて2分し、4目標を主張する立場もある。(e.g., Elliot & McGregor, 2001)。しかし、マスタリー回避目標に関する研究は非常に少ない。達成目標を接近・回避で2分する立場であれば、マスタリー回避目標も実際に研究していく必要があろう (上淵, 2004)。
- 3) マスタリー接近目標と賞賛獲得欲求、および遂行接近目標と賞賛獲得欲求の相関係数の差の検定を行ったところ、両者の差は有意であった ( $z=2.02, p<.05$ )。

## ENGLISH SUMMARY

**The relationship between achievement goal orientations and praise seeking need, rejection avoidance need: Focusing on performance approach goal and performance avoidance goal**

**FUJII Tsutomu**

The purpose of the present research was to examine the correlation between performance approach/



performance avoidance goal and praise seeking need/rejection avoidance need. A performance approach goal is the gaining of competence based on the good ratings of others. Therefore, the performance approach goal was expected to be associated with the praise seeking need. On the other hand, a performance avoidance goal is based on maintainng a competence in order to avoid poor ratings of others. Thus, a performance avoidance goal was expected to correlate with the rejection avoidance need. Participants, 177 undergraduate students took questionnaire surveys, and hypotheses of this research were supported by the results. They suggested that dividing the performance goal orientations in terms of the approach-avoidance dimension is valid.

*Key Words:* achievement goal theory, performance approach goal, performance avoidance goal, praise seeking need, rejection avoidance need